

類義語の分析

投、丟、拋、扔、擲

黃太華

○、はじめに

「投」[tōu]・「丟」[diū]・「拋」[pāo]・「扔」[réng]・「擲」[zhì]は「対象物を手で保持して、次に手を動かし対象物を手からはなす」「手をはなれた対象物を目標点に到達させる」といわれる「投げる」「動作と関係がある動詞である。」「投・丟・拋・扔・擲」のほかに手で物を振り切る動作を表す中国語の動詞は、また「摔・甩・拽・攢」などがある。しかし、これらの動詞の動作は「力を入れて下へ投げつける」意がつよく、すでに「投げる」の原意を逸脱しているから、本文ではそれを省略して「物を遠くのところへ投げる」動詞を主としてあげて討論することにしよう。

一、辞典の記述

現代『國語日報字典』で「投、丟、拋、扔、擲」を引いてみると、

投：(一)扔、擲。如「往山澗裏投一塊石頭」。(なげる)

(二)放進去。如「把票投進票櫃」。(入れる)

(三)跳進去。如「投河而死」。(跳び込む/身投げする)
(四)遞送。如「投書」。(送る/寄せる)
(五)自己找上去或參加進去。如「飛蛾投火」「投身軍旅」。(参加する/……に向う)

(六)歸依、向往。如「棄暗投明」。(身を寄せる)
(七)合得來、契合。如「意氣相投」。(気が合う)
(八)抖。如「舉手投足」。(洗いすすぐ/振るう)
丟：(一)遺失。如「我的錢丟了」。(なくす/落とす)
(二)扔、拋棄。如「不亂丟紙屑」。(投げすてる)
拋：(一)扔、投。如「拋球」。(ほふる/なげる)
(二)捨棄。如「拋棄」。(捨てる/ほったらかす)
(三)廉價傾銷叫「拋售」(投げ売りする)
(四)「拋錨」：①把錨扔到水底、用來停船。(船のいか

りをおろす)

②火車、汽車等在半路上機件發生障礙。

汽車、自動車などがエンコする)

扔：(一)拋出去。如「扔球」。(投げる/ほふる)

(二)丟掉、拋棄。如「把這些廢物扔到垃圾箱去」。(投

げすてる／すてる)

擲：(一)投、抛、扔出去。如「擲鐵餅」。(なげる)

(二)請人把東西交給自己的客氣話。如「擲下」「擲還」。
とある。これを見ると、投、丟、抛、扔、擲の五動詞は「なげる／なげすてる」という共通点を持った語群をなすことが分かる。その中間の差はどこにあるのであろうか。まず例をあげてみておこう。

1. 給我(你／他)。(私／あなた／あの人)に)
2. 給狗吃。(犬に食べさせて)
3. 連三個手榴彈。(手榴彈をつづけざまに三つした)
4. 我了這份工作。(私はこの仕事をした)
5. 把小孩子在家裏不管。(子供を家にして面倒を見ない)
6. 骰子。(さいころをし)
7. 請把球給我。(ボールを私に下さい)
8. 這個沒用，了吧！(これはいらぬ、してしまおう)
9. 把票進票箱裏。(票を投票箱に)
10. 不亂紙屑。(紙屑をやたらにはいけぬ)
11. 在箱子裏。(箱の中に入れておく)
12. 小孩子往水裏石片玩。(子どもは水の中に石のかげらをして込んで遊んでいた)

この十二例文を、日本文化研究所に設けられた「日本語学研究(二)」という授業で黄先生と先輩がたと同級生たちと討論した結果は、次の表のとおりである。

擲	扔	抛	丟	投	
△	○	○	○	○	1.
△	○	○	○	△	2.
△	△	△	○	×	3.
×	△	×	○	×	4.
×	○	×	○	×	5.
×	×	×	○	×	6.
△	×	×	○	×	7.
×	○	×	○	×	8.
×	○	×	○	×	9.
×	○	△	○	△	10.
○	○	△	○	△	11.
○	○			×	12.

(注：○：使う)

△：特定の場面
で使われる
×：使わない)

以上を統計すると、使うか、使わないか

投：○：4. △：2. ×：6.

丟：○：12. △：ない×：ない

抛：○：5. △：4. ×：3.

扔：○：9. △：2. ×：1.

擲：○：3. △：4. ×：5.

となる。明らかに、「丟」と「扔」を使うのが一番多い。一番少ないのは「擲」である。その原因は何であろうか、次に一一述べてみよう。

二、分 論

A、丟と扔

前にあげた『国語日報字典』によれば、丟は「遺失」(なくす／落とす)と「扔、拋棄」(投げすてる)との二つの意味をもっている。扔は「拋出去」(ほうり出す)と「丟掉、拋棄」(投げすてる)との二つの意味をもっている。五動詞の中に

使い方が「擲」と同じように一番少ないものである。が、擲は意味限定のために用法におのずから制限がされたのだと思う。この点については後に述べよう。しかし、丟と扔は意味用法が少ないのになぜ一番よく使われているのであろうか、というのは、両者には「投げすてる」意が強いからであろう。同時に前者は「なくす」、「投げすてる」であって、後者は「ほうり出す」、「投げすてる」であるから、明らかに両者とも目標がなく投げて、しかもすてる動作である。したがって、「目標点がなく投げる」また「すてる」という二つの共通点をもっているから、およそ「投げる」動作であつたら、広く使われることができる。

B、投、抛、擲

『漢和辞典』（諸橋轍次等著）によれば、投の解字のところに次の説明がある。

形声。才（手）が意符。受ユシ（転音トウ）が音符で、また、なげうつ（擲キテ）意を表す。一説に、会意。受は投げ槍の一種で、受と才（手）とを合わせて、なげる意を表すという。

だから、運動競技の場合、投と擲を結合して「投擲」と言われる。「抛擲」と言うこともあるが、ふつう言わないであろう。たとえば、両者は程度の差があると思う。たとえば、

○、向敵人投擲手榴彈。（敵に手榴彈をなげつけた）

○、向敵人抛擲手榴彈。（敵に手榴彈をなげとばした）

抛擲より投擲のほうが力を入れてなげる感じを与える。この違いは、擲という字の関係ではなくて、投と抛と目的の差にあ

るにすぎない。この目的の差は、『ことばの意味1』（平凡社）の説明によれば、次のとおりである。

ナゲル（投）は、（目標点に対象物を到達させる）ことを目的とする。

ホウル（抛）は、（対象物を動作主体の手許からはなす）のを目的とする。（傍点引用者）

（ここで、投は日本語のナゲルに、抛は日本語のホウルにあたと筆者が仮定する。）

このように、「向敵人投擲手榴彈」を「向敵人投手榴彈」、向敵人抛手榴彈」と言い換えてもさしつかえない。「向敵人投手榴彈」は、（敵陣に手榴彈を到達させる）ことが目的で、「向敵人抛手榴彈」は、ただ（手榴彈を自分の手許からはなす）だけで、落着点はどこにあるのかということに関心を持たない。したがって、野球の場合は、「投球」を「抛球」とは言わない。中国の古い、婿を選ぶ式では、「抛繡球」を「投繡球」とは言わないのが、この原因であろう。

擲はやや直線的に遠方へ飛ばせることが多い。投の場合、直線的に勢いよく直線的な軌道に乗せて目標点に速く飛ばすことが多い。抛の場合、対象物の飛行軌道は曲線的である。それで、陸上競技の槍や円盤は「擲」と言う。つまり、「擲標槍」（槍投げ）を「投標槍」「抛標槍」と、「擲鉄餅」（円盤投げ）を「投鉄餅」「抛鉄餅」とは言わない。

ところが、物体の飛行軌道が曲線的である場合に、投を用いることもある。たとえば、バスケットボールをする時、普通「投籃」と言う。「投籃」の動作は拋物線的是るはずだがなげ

「抛籃」とは言わなからうか、つまり、投のほうが、特に狙う所があつて、また物体（ボール）をはやく自分の目標とする点（バスケット）に届かせようとするからである。

C、五動詞の比較

AとBを総合してみれば、この五つの動詞の違いをつくる原因は「対象物の違い」「飛行軌道」「力を入れる程度」にほかならないことが分かる。

①対象物の違い

前の十二例を対象目的語の種類によって分ければ、次の結果を得ることができる。

投：手榴弾、球（ボール）、票

丟：手榴弾、工作（仕事）、小孩子（子供）、骰子（さいころ）、球（ボール）、票、紙屑（かみくず）、石片

（石のかげら）

抛：小孩子、球、紙屑

扔：小孩子、球、票、紙屑、石片

擲：骰子、（石片）

すなわち、丟・抛・扔の場合、対象物が具体物であるとともに、抽象物（子供・仕事）をも対象物とする用法がある。というのは、丟・抛・扔が「すてる」「投げすてる」意がつよいからである。したがって、「丟棄」「抛棄」「扔棄」と言えるが、「投棄」「擲棄」とはふつう言わない。

○、丟下工作。（仕事を投げすてた）

○、抛下工作。（ ）

○、扔下工作。（ ）

と言うが、

○、×投下工作。

○、×擲下工作。

と言わないのが、投・擲のほうが「すてる」意を持たないからである。

投のほうにも、抽象物を対象物とする用法もある。

○、投身軍旅。（軍隊に身を投じる）

○、飛蛾投火。（蛾が火にとびこむ）

○、投考軍事院校。（軍事学校の試験を受ける）

むろん、「軍旅」「火」「軍事院校」は動作主の目標点であるから、「投」を用いるのが自然である。丟・抛・擲は目標点がなく、またほかの所にすてられて已むなく行きたくない所へ行かせられる意がつよいから、使われたら不自然である。

擲は丟・抛と同じように、目標点がなくて、しかし、前三者よりさらに遠い所へ対象物を届かせようとするから、陸上競技でよく使われる。十二例の「擲石片」を、もともと「丟（扔）石片」と言うのが自然であるが、競技の場面であつたら、「擲石片」と言ってもさしつかえない。陸上競技のほかに、「擲瓶」「擲果」「擲下」「擲還」のように書きことば的、文語的で、丟・抛・扔より口語でよく使われない。

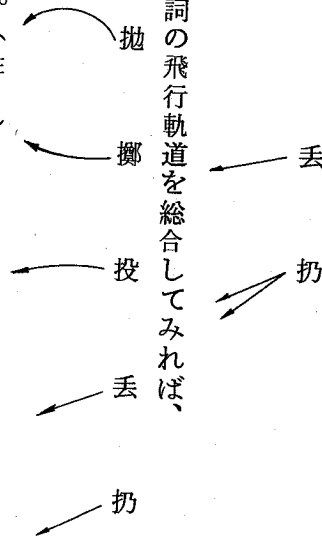
②対象物の飛行軌道

前に述べたように、投のほうがかなりのスピードで直線的に物が目標点にとんでいくことが多くて、抛のほうが曲線的に対象物を動作主体の手許からはなす。擲の場合、積極的なものを遠くへとばすことが普通である。換言すれば、「対象物をは

なすまでの動きの違いに応じて、対象物の空中移動の様態も異なってくる。(註1)だから、投、抛、擲の飛行軌道を次の図で示すことができる。



また、目標点や着地点が違えば、対象物の移動様態も違う。それで、「すてる」という共通性をもっている「丟」と「扔」の場合、着地点が違うとともに、飛行軌道は次のとおりになる。(註2)



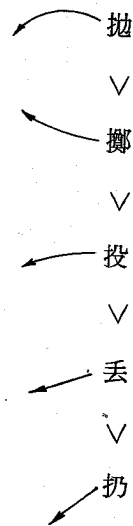
となる。(註3)

③力を入れる程度

力を入れる程度はもちろん物体の移動様態に影響を与える。力を入れるというと、当然手を使う動作に応じて力を運用するわけである。一般に、五語の差異は、空中移動の様態に求められているようである。だから、飛行軌道が長ければ、手を使う動作もそれによって幅がひろい。

そうすると、手の動作は前項の飛行軌道によって次のとおり

になるにうたがわないのであろう。



しかし、力を入れる程度は、手の幅の動作と直接な関係がない。関係があるのは、動作主の当時の目的や動機である。たとえば、野球の場合、ピッチャーはキャッチャーにボールを速くしかも精確になげるために、「投球」と言う。運動選手は槍や円盤を遠くへとばすために、「擲標槍」「擲鉄餅」と言う。舞台上の人は舞台下の人にものを優雅な動作でなげるために「抛繡球」「抛彩帶」と言う。だから、投・擲・抛の、力を入れる程度は、次の順序となる。

投✓擲✓抛

また、丟と扔は本質的に前三者とやや違うから、ここで合せて討論しないほうがいいと思う。なぜかというと、後二者は目標点が不定で、投・擲・抛より手の動作が広くないが、しかし力を入れる程度が必ずしも一番よわいとはかぎらないからである。

丟と扔については、まず次の例を見ておこう。

○、我去丟垃圾。(私はゴミをすてに行く)

○、我去扔垃圾。(" ")

○、把帽子往床上一丟。(帽子を寝台に投げつける)

○、把帽子往床上一扔。(" ")

丟の動作は単純な「すてる」動作であって、扔のほうが、動機がやや不平であり勢いよくすてる動作である。これは、丟が

もともと「落とす」「なくす」のような静態動作の意をもって
いるのであるであろう。

だから、この二者は次の順序となる。

扔V丟

三、複合語をつくる場合

次に五語から作られる複合語を検討してみよう。

投：投子・投手・投止・投考・投契・投奔・投河・投軍・

投胎・投效・投票・投宿・投降・投誠・投資・投遞・

投稿・投標・投靠・投機・投機・投機・投機・投機・投機・

投閒置散・投筆從戎・投鼠忌器・投鞭斷流

丟：丟人・丟臉・丟掉・丟開・丟三落四・丟眼色兒

拋：拋售・拋棄・拋錨・拋物線・拋磚引玉・拋頭露面

扔：（ない）

擲：擲下・擲還・擲瓶禮・擲骰子・擲標槍・擲鐵球・擲鐵

餅

（林恭祖主編『新型國語辭典』文翔圖書公司）

投：投考・投合・投河・投效・投奔・投明・投軍・投契・

投案・投降・投宿・投票・投資・投誠・投遞・投標・

投稿・投靠・投機・投機・投機・投其所好・投袂而起

投桃報李・投閒置散・投筆從戎・投鼠忌器・投機分子

投鞭斷流

丟：丟人・丟手・丟臉

拋：拋空・拋售・拋棄・拋錨・拋磚引玉

扔：扔掉・扔棄

擲：擲下・擲梭・擲瓶・擲還・擲骰子・擲鐵球・擲鐵餅

（薛頌留主編『中國辭典』大中國圖書公司）

以上の二辭典によれば、複合語が一番多いのは投であって、
その反対は扔である、ということが分かる。投は目標点がある
から、「投奔・投考・投案」などのような目的の語につくこと
ができる。扔は、基本的に、ステルと非常に近いから、わざわざ
「一掉」「一棄」と複合する。それで、

○、我們去投票吧！（投票しに行こう）

のように、目的のあることを、

○、我們去票吧！（票をすてに行こう）

或いは、

○、我們去扔票吧！（票を投げすてに行こう）

とは言わないのが、この原因であると説明できる。

目標点がある、また主動的であるから、

「棄暗投明」（暗黒より光明に向う、悪人が転向すること）

「飛蛾投火」（蛾が火にとびこむ）

「投奔自由」（自由世界に身を寄せる）

などのように、引き伸ばされた意にも、多く使われる。

丟は、『辭海』（中華書局）によると、「一去不返也」（無
くなって返らず）で、もともと「投げる」意がなく、「落とす
」「失う」の意がつよいと思う。

「丟臉」（面目を失う、恥をかく、恥ずかしい思いをする）

「丟面子」（＝丟臉・メンツがなくなる）

「丟三忘四」（よくあれを忘れこれを忘れる）

「丟三忘四」（よくあれを忘れこれを忘れる）

のような例はやはり「なくす」「失う」「落とす」意が含まれ

ている。丟の「投げる」意は「投げすてる」から引き伸ばされて、「投げすてる」意は「すてる」「落とす」から引き伸ばされて生じたのであろう。だから、「東西、丢了」は、二つの意味がある。一つは、

「物は、なくした。」

であって、もう一つは

「物は、もう投げすてた。」

という意味である。

次に「丟棄」「拋棄」「扔棄」について考えてみよう。前述のとおり、丟・拋・扔は「すてる」意をもっているから、「―棄」と複合する。擲はやや文語的であり、現代語では、もっぱら前三者の用法が一般的である。

四、主 体

「丟」以外に、すべては「才」（手）へんで作られた動詞であるから、動作主はすべて人間であるはずだ。「投げる」動作は人間の手によって生じたのである。手を動かし、対象物を空中へ飛ばすのが、こういう人間の「投げる」動作である。したがって主体はすべて人間である。しかし、次の例の場合は、どうであらうか。

○、小狗吃到一半、看到一羣野狗跑來、便將嘴裏唧著的骨頭丟至一旁、落慌而逃。（小犬は食べた途中で、野良犬が群がってやってくるのを見て、口にくわえれていた骨をかたわらにすてて、泡を食って逃げた。）

小犬は手がなく、「すてる」動作を示す時、口を手として使

うのが当然である。「將骨頭丟至一旁」（骨をかたわらにすてる）の丟は投げすてる動作であって、口で投げすてるのは、既に犬を人間化して口を手として使うことになる。

ところが、

○、我的工作丢了。（私は免職になった）

○、我的錢包丢了。（私は財布がなくなった）

での「工作」「錢包」は手によって投げすてたのではなく、自然になくなったのであるから、主体と見られるかどうか、人によって見るところが異なるのであろう。しかし、「誰の財布がなくなったのか」「誰が免職になったのか」、主体はやはり「我的」「我」（私）であるから、「わたし」という人間を主体と見るのを認めることができよう。

五、おわりに

以上の各節を総合して、五動詞に対する結論としては、

- (1) すべては手を使う。
- (2) 対象物によって、五動詞を使う。
- (3) 手の動作や力と、目標点によって五動詞を使う。
- (4) すべては動詞として使われる。名詞の場合、複合語で表す。（扔は動詞だけで使われる）

(5) 手を使うから、主体はすべて人間。
というように、集約できる。

また前の三つの点にしたがって、五動詞の基本的な特徴を整理して示すと次のようになる。

A、五動詞の共通点：

- (1) 使う工具：手
- (2) 物体の移動の根源：手の力の多少
- (3) 動作：手を動かし、対象物をはなす
- (4) 移動様態：空中

B、五動詞の相異点：

投：対象物を直線的にはやく目標点に到達させるのを目的とする。

丟：目標点が不定で、対象物を手許からはなし、やや直線的に動作主の向こうや相手へとばすのを目的とする。

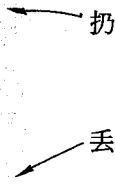
抛：目標点がなく、対象物を手許からはなし、曲線的に空中へとばす。

扔：丟とごく相似して、丟よりやや力を入れる。

擲：対象物になるべく遠方へとばすのを目的とする。またその対象物は、競技手段とされる。（「擲骰子」（さいころを投げる）の「骰子」（さいころ）も競技手段とされる物である）

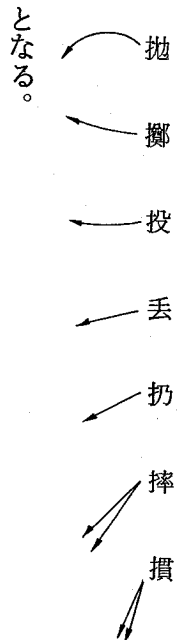
註(1) 『ことばの意味1』（平凡社）一七四ページ。

(2) 目的の違いによって



のようなこともある。

(3) もし「摔」「擯」を加えて比較すれば、



となる。

参考書目

1. 『中日辞典』（一九八二）諸橋轍次等著信華圖書公司
2. 『中日大辞典』（一九八〇）大新書局
3. 『国語日報字典』何容主編一九八五年國語日報社
4. 『辭彙』陸師成主編一九七四年文化圖書公司
5. 『辭海』上册中華書局
6. 『ことばの意味1』柴田武編一九八二年平凡社